コンセプト下水道【第13回】
（特別対談「熱い人と語ろう！」Vol.4）

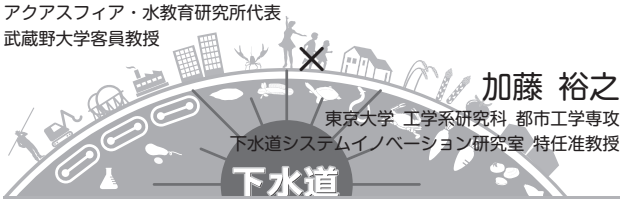
流域生活

～未来志向の上下水道～

橋本 淳司
水ジャーナリスト
アクアスフィア・水教育研究所代表
武蔵野大学客員教授

×

加藤 裕之
東京大学 工学系研究科 都市工学専攻
下水道システムイノベーション研究室 特任准教授



イラスト：諸富里子（環境コンセプトデザイナー）

「コンセプト下水道」の特別編として、ゲストを迎え、下水道やコンセプトについて語り合う「熱い人と語ろう！」シリーズ。第４回のゲストは水ジャーナリストの橋本淳司さんに登場いただきました。

水の概念が覆ったバングラディシュの女性の一言

加藤　先日、橋本さんが出演されているYouTubeの番組「じゅんかん'sBAR ＃７」にゲストとして呼ばれ、ビストロ下水道などをテーマに話をさせていただきました。今回は私がホストで橋本さんがゲストということで立場が逆になりますね。はじめに水との出会いを含めてこれまでのご経歴を話していただけますか。

橋本　巷で「水ハカセ」などと呼ばれることもあって恥ずかしいのですが、これまで水を学問としてきちんと学んだことはありません。言ってしまえば趣味の延長線上みたいなものです。水に興味を持ったきっかけの１つが、東京の水道水です。大学で上京して初めて飲んだのですが、実家のある群馬県の水とずいぶん違うなと思いました。場所によって水の味が変わることが非常に新鮮で面白く感じ、それから全国の浄水場や水源地を訪れるようになりました。いい水を見つけると持って帰って友だちにお裾分けしたりしていたのですが、大抵、引かれましたね（笑）。

大学卒業後は出版社に勤めました。水とは関係ないビジネス書やエンターテイメント系の新書の編集などに携わっていましたが、自らルポを書きたいと思い、20代の半ばに会社を辞め、フリーのジャーナリストとして独立しました。フリーになって初めての仕事がフランスのミネラルウォーターについての取材でした。当時は1990年代で、エビアンやヴィッテル、ヴォルビックなどのブランドが次々と日本に輸入され始めた頃でした。フランスの採水地をいくつかめぐり、ミネラルウォーターの効能に関するルポと、企業による地下水の保全活動に関するルポの２つを執筆しました。当時は健康ブームだったこともあり、前者はいろんな雑誌に取り上げられ評判だったのですが、後者の企業の保全活動の方は全く反応がありませんでした。

加藤　今だったら企業活動の方も注目されそうですけどね。

橋本　当時は全然でしたね。水を守るということ自体、何を言っているのか理解されないという時代でした。

加藤　でもフランスではすでにその頃から企業にそういうマインドがあったわけですよね。

橋本　はい、ありました。ヴィッテルを取材した時に驚いた光景があります。出荷用のトラックが工場の脇を通ると、雨が降った後だったので垂れたオイルが虹色に光っていたのですが、それを見つけた工場の人たちが駆けつけ、土の上を雑巾掛けしていました。「このオイル、まさか水源までは到達しないと思いますよ」と言ったら、「こうした習慣が水を守ることにつながるんだ」と言われ、びっくりしました。

加藤　私も何度かフランスを訪れましたが、確かにフランス人の水に対する意識の高さは実感しました。生態系を守るために水を大切にすることが目標になっています。

橋本　フランスから帰国すると、続けてバングラディシュを取材する機会を得ました。水道が整備されていない国で、井戸のまわりに集まって水を飲んでいる女性や子供たちをよく見かけましたが、その中に赤く塗られた井戸がありました。「これは何ですか」と聞くと、地下からヒ素が出る井戸とのこと。実際、肌が褐色になるなどヒ素障害を抱えた子どももいました。義憤にかられた私が「子どもにこんなものを飲ませたらダメですよ」と注意したら、ある女性から「そんなことは分かっている。けれど、これしかないんです」と言われました。当時の私にとって水は美しく、美味しく、いろんな病気に効くなど、ポジティブな面しか頭になかったので、女性の言葉にショックを受けてしまい、水にかかわる仕事はこれで辞めようとさえ思いま

した。けれど、何もやらないまま終わるのも嫌だなと思い直し、情報発信をすることで何か役に立てるかもしれない、いろんな問題を抱えている人たちの話をできる限り聞いてみようと考え、水ジャーナリストとしての活動を本格的に始めることになりました。

子どもたちの将来を考えた議論を

加藤　橋本さんはジャーナリストとしての活動だけなく、水に関する教育にも国内外を問わず熱心に取り組まれています。

橋本　ジャーナリストの立場でどこまで教育の現場に携わっていいものか葛藤もあるのですが、2002年に学校教育で「総合的な学習の時間」が設置された時、ある小学校の校長先生から海外で見聞したことを伝えてくれないかと依頼を受けました。それまでは人前で話すのも苦手だったのですが、それを機にペラペラと喋る人間になってしまいました（笑）。

私が撮影した写真を１枚ずつ解説すると、学生からは「海外にはそんな可哀そうな人がいるのか」という同情的な反応がほとんどでした。しかし、その言葉の裏には「自分には関係ないけどね」という、どこか他人事のニュアンスを感じました。そこで私は、これは伝えれば伝えるほど逆効果だと思いました。こんな意識を子どもたちに持たせてはよくない。自分たちの問題として考えてもらうにはどうしたらいいのか。最初はその答えがなかなか見えず、ワークショップ形式の授業をやったり、子どもたちを実際の河川に連れていったりと、試行錯誤を繰り返しました。そのうち７割は失敗、残る３割も上手くいったのかどうかよく分からないような状態でしたね。

そんな中、国交省から打診をいただき、中国で節水リーダーを育てる外務省（JICA）のプロジェクトに参加しました。2007年から2011年にかけて短期滞在を繰り返し、中国の人たちに水の大切さを知ってもらう環境を整備するため、教育指導者の育成や教育プログラムの作成などを行いました。教育の仕事を続ける上でこの経験は大きかったですね。

加藤　私も海外のことを伝える機会がこれまで何度かありましたが、聴き手のリアクションがあるだけで満足してしまい、その反応の仕方に問題意識を持つことはありませんでした。ですから、橋本さんの今のお話はとても新鮮でしたし、ドキッとしました。子どもたちに海外の悲惨な状況を自分ゴト化させる何かよい方法は見つかりましたか。

橋本氏

橋本　海外で起こっていることと自分たちの身の周りで起こっていることを比較させるのは、１つの方法だと思います。例えばエチオピアでは水道が未整備で毎日のように水を汲みに行かなければなりません。日本では地震や大雨などの災害で水道が使えなくなり、同じような状況が起こりえます。その状況が１日、10日、１ヵ月と長くなるにつれてどうなるか子どもたちに想像してもらいます。その上でエチオピアと日本の違いについても考えてもらいます。日本の子どもたちは教科書を背負って通学しますが、エチオピアの子どもたちは生活のために教科書の代わりに水を背負って運びます。その教科書と水という時間の使い方の違いが、10年、20年後にどう影響していくのか。そう考えると、皆さんが彼らにできることは、ただ水を提供することだけでなく、教育の支援など別の方法もあるのではないか。こんなことを皆で議論してもらいます。

地理的に似ている環境を持っているところは比較しやすいですね。例えば印旛沼や霞ケ浦でワークショップを開く時はカンボジアにある東南アジア最大の湖・トンレサップと比べてみたり、地下水の活用で有名な静岡県三島市と、先程お話したバングラディシュの井戸水からヒ素が検出される話を対比させてみるとか。

加藤　同じようなところもあるが、違うところもたくさんある。類似性と異質性の両面から考えるということですかね。

橋本　はい。その際、地理環境だけでなく、経済と文化も含めた３つの視点が重要だと考えています。例えば水の問題と言ってもお金があれば解決できるものもあり、同じ地理環境でも経済性の違いで変わってくると思います。文化も然りです。

加藤　橋本さんはジャーナリストと教育者の２つの顔を持っていますが、２つの仕事を手がけることによる相乗効果みたいなものはありますか。

加藤氏

橋本　教育の仕事を始めてからジャーナリストとしての視野が広がった気はしています。表層的な問題を大騒ぎしても意味がないという意識はいつも持っていますね。これが問題だと煽るような記事の方が確かにウケはいいのですが、そうした記事はあまり書きたくないというのが本音です。

例えば少し前に騒ぎになった“水道の民営化”ですが、大騒ぎしている人たちが将来のまちづくりのことまで考えているのか、個人的には疑問を感じました。むしろ、いま自分が安い水を飲めればいいという極めて近視眼的な考えが根底にあるような印象を持ちました。

一方、教育の仕事に携わると、常に10代の子どもたちが目の前にいます。この子たちにとっていいまちをつくるためには、その問題をどう捉えるべきか。こうした視点に自ずとなってしまいます。

加藤　なるほど。目先ではなく、10年後、20年後の子どもたちの将来を時間軸で考えた上で、その問題と向き合うということですね。私も子どもたちのことを考えることはありますが、橋本さんの場合は実際に普段から子どもたちと接しているので、より実感の伴った強い気持ちが生まれるのだと思います。

橋本　将来世代を意思決定の場に置くことも大事だと思います。施設の老朽化に伴い使用料の改定を検討する際も、大人たちだけで話し合うと反対意見ばかりになってしまいますが、子どもたちにとってはいま値上げしてくれた方がいいわけです。時間を解の中に入れると、見えてくるものが全然違ってきます。

流域単位でまちづくりや暮らしを考える

加藤　以前お会いした時、流域単位で物事を考える重要性について語られていたのが印象に残っています。改めて話してくださいますか。

橋本　コロナ後の社会を考えた時、今まで進展してきたグローバルサプライチェーンが、ゼロにはならないにしても、幾分かは地域にシフトしていくことが予想されます。また同時に気候変動にも襲われており、今年も大雨で熊本県の球磨川が氾濫したように流域単位で被害が発生しています。

こうしたことを踏まえると、これからは流域が、モノの循環や人の知恵を集結すべき１つの単位になってくるのではないかと考えています。安全なまちづくりという観点から治水や利水などを流域単位で考えることは非常に合理的ですし、その最先端にあるのが流域下水道だと思います。

水だけでなく、流域全体の政策を考える場合は、これ（水）に森林、食べ物、エネルギーといった要素が加わります。例えば上流部では水力発電でエネルギーをつくり、下流部では下水汚泥を使って食物を栽培する。１つの流域の中でこれらの要素を組み合わせて、それぞれの自給率を上げていくことができれば、企業活動や人々の暮らしを含めた流域という生活圏が持続可能なフィールドとして浮上してきます。“流域生活”と言ってもいいかもしれません。

加藤　おっしゃるとおり、水を動かすエネルギーなどの効率性の観点からも、リスク管理の観点からも、流域は非常に合理的です。日本は都道府県や市町村で分かれていますが、これは多分に政治的に決まっている部分が大きいと思います。政策も、国、都道府県、市町村という単位しか想定していません。しかし、コロナ騒動で都道府県間の移動があれこれ言われているように、現状の括りではエゴや軋み生じてきています。ポストコロナにおいて新たな価値を生み出すためには、都道府県や市町村の括りから一旦離れて、より広域的な流域単位で考えてみることも大切かもしれません。

橋本　そうした中で、下水道がなぜ流域下水道なのかを発信することは凄く意味があると思います。

加藤　そうですね。過去にいろんな議論がありましたが、下水道関係者はいま一度、流域下水道の生み出している価値を流域管理という視点から考えてみるべきですね。

ところで流域について強い思いを持ち始めたのはいつ頃からですか。何かきっかけでもあったのですか。

橋本　流域を意識したのは小学校に上がる前ですね。

加藤　そんなに前からですか。流域という言葉をよく知っていましたね。

橋本　その頃、父親が亡くなり、母親が前橋に働きに出ることになったので、私は祖母の家に預けられまし

た。祖母の家の前には早川という利根川の支流が流れており、私が寂しそうに早川を眺めていると、祖母が地図を持ってきて「この川はお母さんのいる前橋につながっているよ、同じ利根川流域だから」と言って、流域の仕組みについて教えてくれたのです。

加藤　おばあさんがまず凄いですね。それにしても小学校前から流域を知っていたとは驚きです。子どもの頃の原体験は大事ですね。

バックキャスティングという未来志向の考え方

加藤　官民連携（PPP）についても伺いたいと思います。水道法改正などをテーマに橋本さんがメディアで語っている場面を拝見すると、どちらかというと民間は悪だという立場で出演されていることが多いように見受けられましたが（笑）、実際のところは官や民の議論についてどうお考えなのでしょうか。もしかすると誤解されている部分もあるのかなと思いまして。

橋本　水道にしろ、下水道にしろ、民間は一切携わっていないという意識で話をされる一般の方が多いです。しかし現実はずいぶん前から多くの割合で民間が携わり、官民連携が行われています。そうしたことを踏まえた上で、私は官と民のバランスが重要だと考えます。官が強く民に適切な対価を払っていないところもあれば、逆に官が民間に任せっきりで民間の言いなりのようになっているところもある。官民連携は必要不可欠だと思いますが、先程も言ったように、現在の解だけに目を向けるのではなく、10年後、20年後の将来的な上下水道経営を見つめた上で、よりよいパートナーシップを組むことが重要だと考えます。そうした観点で言うと、現在の課題を解決するという契約方法だけではなく、今後どうなっていくかという中長期的な視点を取り入れた契約方法やモニタリング体制が必要ではないか。これが官民連携に対する私の意見です。

それから、もっと自治体は将来のあるべき姿を考えていただきたいですね。それを考えないで「官だ、民だ」という議論するのは変に感じます。「こうなりたい」という将来像があった上で、そのためには「どういうパートナーシップを組むべきか」が次にくると思うからです。

加藤　まずは将来像を自ら考えるべき、ということですかね。橋本さんの近著『対話して行動するチームのつくり方』（三省堂）を読みましたが、その中でも、未来の理想像を起点として今何をすべきか考える“バックキャスティング”という思考法が紹介されており、なるほどと納得しました。というのも、役所は現状分析型をとることが多いので、ある意味、真逆なんですよね。

橋本さん著『対話して行動するチームのつくり方』（三省堂）

橋本　上下水道管理者が考えた将来像を市民や首長、議員にきちんと知ってもらいたいとも思います。最近も新型コロナを受けて利用料金等の減免措置をとった自治体がたくさんありましたが、上下水道の将来像を知らないのにそれを当たり前と思っている首長や議員が多く、市民もそれに疑問を持っていません。現実とリテラシーのギャップを感じます。

加藤　日本の上下水道事業はまだまだ透明性が低いということが言えるかもしれません。裏を返せば、水に興味を持ってもらえていない。大学で教員をやっていますが、どうしたら学生が水に興味を持ってくれるかは大きなテーマです。人・モノ・カネのマネジメントと言いますが、人についてはすでに下水道の世界にいる人をマネジメントするだけではいずれ限界がきます。この世界に入ってくる人材にも目を向けないと本当のマネジメントはできないと感じており、そうした意味でも本日はいろんなヒントをいただきました。ありがとうございました。

◆お知らせ◆

下水道システムイノベーション研究室のホームページ（https://www.envssil.t.u-tokyo.ac.jp/）を開設しました。研究室の活動など随時アップしていきます。